
わたしの足元に

敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしの足元に

【Nコード】

N1913C

【作者名】

敬

【あらすじ】

とある女が出掛けたその場所で、女に起こったいくつかの出来事の話です。『君の足元で僕は』のやや続編です。

さっき、知らない男がわたしの目の前で『逮捕』された。

わたしは、そのいわゆる『逮捕劇』のラストシーンを、実に興味深く鑑賞した。それはあまりにもドラマチックで、そんなことってある？ っていうくらいバカバカしかった。だからライブって大好きだ。だってライブなんだから、ナマなんだから。

わたしはその日をずっとほんとうに楽しみにしっていて、終業時間キツカりに会社を出ると公言していたにもかかわらず、くそったれな仕事は少しだけ長引いて、急いでその場所に行ったときは、ちょうどバンドとバンドの演奏の合間だった。

誰だか知らないDJが、昔っぽい知らない曲をかけていたところだったのだけれど、その曲ときたらびっくりするくらいへボくてしばらくは我慢してみたものの、やっぱりへボいまんまで、わたしは曲が変わるまでもそこに居続けられなかった。なあに、コレ？

カウンターでビールを頼み、バーテンの男の子とちょっとした世間話をした。かわいい顔をした男の子。彼はきつとまだ若くて純粹で、でも少し屈折してる、たぶん。そんな彼はいかにもロック少年然としていて、ちょっといい。彼は、この町が性に合わなくて、来月には田舎に帰ることにしたんだと言った。名前も聞かなかったけど、彼がわたしの恋人だったらいいのと思った。

彼は、内緒ですけど、と言いながら、安っぽい、たぶんほんとに安いプラスチックのコップに注いだビールをご馳走してくれた。ラッキーだ、今日はツイている。

男の子にお礼を言って、小さな庭をくぐり抜けて道に出ると、輪切りにしそこなった長芋みたいな薄っぺらい白い月が夜の闇に浮いていた。

黒い空を仰いだ。鼻から大きく息を吸うと耳の奥でシュワシュワとソーダの泡がはじけるような音がした。わたしの耳、大きな音を

聞いた後はいつもそうなる。わたしはそのシュワシュワという音のような、気配のようなものが好きだ。

空気の粒が、体中の毛穴を埋めてしまっているみたいに息苦しく蒸し暑い夜。リー、と何かの虫が鳴いた。そろそろ戻らないと。

庭を抜け、入り口の扉に手をかけたとき、中年男に声をかけられた。

「あんた、ちゃんぽん、好きか？」

唐突にして意味不明の質問で返答に詰まった。そもそも、ちゃんぽんって何？何のことを指してるんだ？あの、パリパリした細い麺の上に野菜炒めのあんかけみたいのがかかった食べ物のこと？野菜炒めがやたらたくさんあった白っぽいスープのラーメンみたいなやつのことか？それとも、いろんな種類のお酒を代わる代わる飲むようなお酒の飲み方のことなのか？

私が黙っているとその男は続けて言った。

「ここらへんじゃまったくロクなちゃんぽん食わせる店がねえんだよ。なあ。ちゃんぽんがあったところでしょせんクソだ。ちよつとマシな店があったんだけどよ、こないだ食ったら調理法が変わってたとか言つてよ、麺の硬さに注文もつけねえで味まで落ちてんだ、畜生め！ちゃんぽんはやっぱり長崎じゃねえとダメだ。本場長崎で食ってみろよ、ちゃんぽんを。こんなにうまい食いモンがあるのかって思い知るぞ、バカどもが！ウエックシヨーイツ、くつそお、おらああ！！」

気に障る声。バカみたいに大きいだけのウソくさいくしゃみ。なんなの、このおっさんは？バツカじゃない？

そのおっさんよりだいぶ年若く見える部下みたいな、これまたダッサいもう一人の男が、無礼なその冴えないおっさんを制している。全部うっとおしい。全部気に入らない。話の内容から察するに『ちゃんぽん』とは『長崎ちゃんぽん』とか言われる食べ物のことらしいが、知るか！そんなこと！

「クソはあんただよ！」

まさにそう言おうと息を吸い込みかけたそのとき、ドアの向こうで古くさい曲が鳴り止んだ。もう行かないと。

ありったけの力でドアを押し開けると、まるでそのタイミングに合わせたかのように爆音がドアを突き抜ける。なんて素晴らしい瞬間！こんな瞬間って、まさにこの「今」しかないんだということに感激して興奮したら、わたしはもうおっさんのたわ言なんてどうでもよくて、ステージに向かって駆け出していた。

理性なんかブツ飛んで、明日なんてどうでもよくて、「今」だけが必要で、わたしは本能だけになる。明日の仕事もいらない、男もいらない、薄暗いこの闇に響く音だけでいい。

心のずっと奥底が痛むような、たまらなく切ないスローバラードが始まり、いつの間にか自分の四肢も胴体も無くなって、耳の穴だけになったみたいになって、息が止まる。息することすら煩わしいくらい音に圧倒されていた。音楽のあるこの今がこの上なく幸せだと本気で思った。この時間がずっと続くといい。ライトに照らされた彼らの熱演は続く。…でも。

ほんの少しの違和感がわたしの心に生まれた。ステージ上の彼らの熱のようなものが、少しづつ冷めていくような気がした。あれ？なに？こんなだっけ？前に見た彼らの姿と音とを比べる間もなく、彼らの熱はみるみるうちに失われ、もう彼らは熱も、意志も持たない、ガチャガチャと音をたてるおもちゃの人形みたいだ。

熱のない音楽なんて耳の穴を通り抜けるただの音。音がわたしの耳の穴をスースーと通り抜けていく。

幸せな時間なんてそう長くは続くもんじゃないでしょ、そんなこともう知ってるはずでしょ。乾いた気持ちで自分にそう言い聞かせたけど、実際のところ、心の奥底は悲しがっていることもわたしは知っている。

今日はツイてない日。それじゃダメかな？自分の心に問いかける。いいんじゃない？そんなモンでしょ。心は答える。たちまちに心に

舞い戻って来た理性のあまりの冷たさと優しさに呆然となった。

「キヤー」という黄色い声がしたかと思ったら、大勢の人がいっぺんに動いてわたしは目の前にいた大男に弾き飛ばされた。音が伸びたゴムみたいな調子で止んだ。

大男がゆっくりと振り返った。赤い目をしている。必要以上にわたしに顔を近づけると「あれえ、ごめんね。大丈夫？」とニヤけた調子で言った。酒臭い息がわたしの鼻先にかかった。

衝動が足元から一気に脳天を突き抜け、頭の上でパツと弾けて散った。わたしは大男を思いっきり突き飛ばした。少し後退しただけのそいつは、再びわたしに近づいてきて、何かを言いながらわたしの顔を平手で叩いた。わたしもすかさずそいつの顎のあたりを叩き返した。力をこめて。

ものすごい緊張感が二人の間に走り、とたん大男がわたしに掴みかかってきて、わたしは無茶苦茶に手足を振り回して男の力に抵抗した。こんなやり方しか知らない。鈍い痛みが何度か体や顔を通り過ぎた。

不意に男の力が緩んで、男の体はわたしの体からあつという間に離れていった。視界にバーテンの男の子が大男を羽交い締めになっている姿が映った。わたしの体も誰かに押さえつけられていた。

バーテンの男の子は「ちょっと何やってんすか」とか何とか言いながら大男の両脇を抱えている。大男は体の自由を奪われたまま、床に置いてあったおっきなトマト缶みたいなのを蹴飛ばし何事かをわめいている。わたしはというともうとっくに気が済んでいた。くだらない。

わたしはわたしを押さえつけている誰かの腕を振りほどくと壁にもたれた。鼻をすすったら口の中が血の味がした。鼻血を出していることに気づいて、手の甲で鼻のあたりをぬぐってもう一回鼻をすすった。

さてと。こんなつまらない場所に長くいるもんじゃないわ。もう帰ろう、うちに。それからゆっくりお風呂に入ろう。アマリリスの香りのするバスソルトをたっぷり入れて。

それってというのが、昨日の仕事途中に何の気なしに立ち寄ったお店で何の気なしに匂いをかいだら、泣き出しそうになるほど懐かしいような匂いがして、わたしは片手に蓋を、片手にボトルを持ったままぼんやりした。そのときにわたしが見ていたもの。家族と暮らした家。静かに降る六月の雨。庭に咲く真っ赤なアマリリス。子ども用の長靴を履き、子ども用の傘をさし、雨にうたれるアマリリスをただただ見ていたあの日。護られていた、幼い子どもだった日。あの日に履いていた長靴の色は赤だったかなあ、黄色だったかなあ……。

ウィンドウの外を派手なデコトラがブロロローツと派手な音を立てて通り過ぎて、やっと我に返った。この続きはお風呂で、と。そうしてつい買ってしまったものなんだけれど、それは今日みたいなこんな日にぴったりなんじゃないかと思ったら、昨日それを手に入っていた自分に、よくやった！わたし、と言いたい。

と、そんなことをぼんやりと考えていたそのとき、目の前の人垣が急に開けた。わたしの足元には男が転がっている。

――今度はなに！？この人、なあに？なんで転がってる？

男が顔を上げてわたしをじっと見た。わたしもじっと見たけど、知らない男だった。なんなの、そんな切なそうな顔してさ。そんな顔をしてわたしを見ないでよ。わたしはあなたのことなんて知らない。たぶんあなたもわたしのことなんて知らないんでしょ？

ドサドサツという音がしたと同時に、その男は素早くポケットに手を入れ、何かを放り出した。ころころと頼りなげにわたしの足元に転がってきたもの、それは銀色にきらきら光る宝石だった。わたしが昨日、ソーダの泡をイメージして丁寧丁寧に塗った爪の銀にそっくり。

こんなことってある？こんな、二流な映画のワンシーンみたいな

こと。なんてバカバカしくてドラマチック！

「尾崎修一！窃盗の罪で逮捕する！！」

フロアに響き渡るデッカい声と、聞き慣れない雰囲気言葉に驚いて顔を上げると、転がった男の上にさっきわたしに声をかけてきたムカつく中年男たちが乗っかっている。無礼なオヤジの方が立ち上がって忌々しそうに男の前に回った。男のあごをつかんで、いたぶるみたいにしてグリグリやっている。今この瞬間のために生きている、そんなふうに見えた。オヤジは転がった男に向かって何かを言ったけど、わたしの耳にはなにも聞こえない。卑しい顔。さっきこの男が私に向かって投げつけた、多すぎる言葉の数々が浮かぶ。哀しい男。

パクパクと魚みたいに動くオヤジの口元を眺めて思った。「ああ、長崎ちゃんぽんが『ふるさと』の誇りなんだなあ」

そう思うとわたしはなぜだか急にどうしようもなく切なくなったり、やりきれなくなったり泣きたくなった。そうしたら笑うしかなかった。だから笑った。笑わないと泣いてしまいたいそうだった。

――にげる。

わたしの感情とは別のところが、不意にわたしに命令した。咄嗟に足元にある宝石を拾い上げ、出口にむかって駆け出した。庭を抜け、道に走り出た。リー、という虫の声のあとに、キーツと耳障りな音がして、身体に大きな衝撃を感じた。

一瞬だけ、薄っぺらな白い月が近づいて、カコンと軽い音が聞こえた。銀色の宝石が、黒い車のフェンダーミラーに跳ね上げられてチラツと光ったのを見た。次の瞬間に身体は道に叩きつけられた。

妙に静かな夜の闇の地べたに横たわって、シュワシュワという音が耳の奥で鳴っている。サイレンの音が聞こえる。オザキって言うってたっけ、あの男を迎えに来たのかなあ。あの人、ドロボーかあ。あの人、ツイてないよなあ……まあでもドロボーだしなあ。ああ、痛いなあ。なにこれ、ほんとツイてない。ああ、これもライブなんだ

なあ、ナマなんだなあ。ああ、痛いなあ。お風呂、入りたかったなあ。アマリリスの匂いで泣きたかったなあ。

「ハイッ。事故です、交通事故です！ハイッ、被害者、えー、ハイッ。糸川桐子、ハイッ。所持品の免許証で確認しました、ハイッ。タクシーとの接触です、ハイッ、急いでお願いします」

「わたしの名前を呼んだのは、だあれ？ハイハイ言ってんじゃねえよ。勝手にわたしの免許証なんて見ないでよ。ねえ、さっきのオヤジ、もうあいつをどっかにやってちようだいよ。ねえ、あんたが誰だか知らないけれど、あんたの声は、さっきのオヤジに似ているけれど、ねえ、あいつ、いらないの。ねえ、聞こえた？

ああ、サイレンの音が聞こえる。どこか、遠いところで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1913c/>

わたしの足元に

2010年10月16日05時01分発行